

～ セピア色の風景 ～

「こーど」

青田 茂雄

仙台建設業協会専務理事

私の故郷、相馬は、〝都心〟中村の街から松川浦にかけて、田んぼの平野が広がる。福島県の浜通りでは、広い方だ。その田んぼの平野を、親父たちは、〝こーど〟と呼んでいた。きつと「耕土」のことだっただろう。そのこーどの風景の移り変わりは、四季そのものであった。

草の芽の出とともに、田んぼが耕され、水がはられる。草の香りが強くなるとともに、田植えが進む。こーどは一面水で、まさに銀盤の平野の中で、細い線でしかない稲の苗は、日に日にそれを太くし、銀盤を緑の絨毯に変えていく。その緑は、力強く空に向かって伸び、株を増やし、お盆前の暑いひととき、小さなちいさな花を咲かす。細長い葉の中で守られていた緑の穂は、いつしか主役に

躍り出る。

スズメたちが、歓迎する祭りの囃子のように、にぎやかに鳴く中、穂は大きく実を熟し、お日さまに感謝の首を垂れる。こうしてこーどは、黄金色の絨毯と化する。

稲穂は、農民たちによって刈り取られ、田んぼの宝石たるコメとなるため、あぜ道でしばし乾燥の日々を過ごす。

西の阿武隈の山並みに日が落ちるのが早くなり、赤トンボが飛び交う中、稲束は馬車で農家の納屋へと運ばれる。そして、再びこーどは黒い平野にもどり、切り取られた稲株からは、新たな緑が出てくる。稲株の下では、農民の目には見えない、来春の準備が始まる。

繰り返し耕され、人びとに恵みを与えてくれた相馬のこーどは、今、根こそぎ浜辺



相馬バイパス(国道6号)から望む「こーど」

から抜かれた多くの松が転がったままの、荒涼たる〝荒土〟となっている。

農民たちは、あらためて自然の喜怒哀楽を甘受する重みをかみしめながら、その風景に立ち向かっている。

●あおた・しげお 1956年生まれ。福島県相馬市出身。2016年5月から仙台建設業協会の専務理事を務める